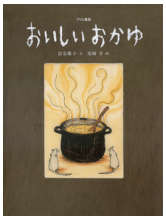
episode 11 「自分のために」より、「誰かのために」

投稿者　くるみ さま（埼玉県）



グリム童話
『おいしい おかゆ』
冨安陽子 文・尾形 幸 絵
フェリシモ出版　2008年

私は好物を聞かれた時、「おかゆ」と答えている。
珍しいと言われるが、30年以上変わっていない。
それは、ある絵本がきっかけだった。

幼少期、とても体が弱かった。かけっこをすれば咳が出るし、プールの後は必ず熱を出す。
緊張や疲れですぐに胃痛がして、幼稚園は週の半分も通えていなかった。
登園できたとしても、数時間もしないうちに何らかの症状が起こり、お昼ご飯を食べる前に早退することが多かった。
手つかずの弁当を抱えて帰る時の、あのカバンの重さを今でも鮮明に覚えている。
作ってくれた母を思うと胸が痛んで、オバケでも妖怪でもいいから私の弁当をこっそり食べてくれやしないかと、熱っぽい頭でいつも考えていた。

そんな時、私は一冊の絵本に出会った。グリム童話の『おいしいおかゆ』。
母親と暮らす貧しい少女が、不思議なおばあさんに出会って、無限におかゆが煮える鍋をもらう話だ。
それは、何軒目かに受診した小児科でのことだった。
「食がとても細いんです。体調を崩すたびに体重が落ちてしまって」母が声を詰まらせながら医師に相談していた。
すると、でっぷりと太ったその医師は、私の顔を覗き込み、
「食べたらお腹が痛くなるんじゃないか、って君はいつも心配していないかい？」と言った。
私は、首が千切れんばかりに頷いた。
医師は大きな口でカカッと笑うと、本棚から絵本を取り出した。それが、『おいしいおかゆ』だった。
「実は、鍋からおかゆがあふれてしまって困ってるんだ。無理はしなくていいから、時々手伝ってくれるかな？」
そう言って、絵本の最後のページを開いた。
そこには、おかゆまみれになった町と、雪かきのようにしておかゆを食べる人々が描かれていた。

それから、少しずつ食事が摂れるようになった。不安なく食べられるメニューも増えていった。
「自分のために食べる」より、「誰かのために食べる」方が私には向いていたようだ。
今でもおかゆを食べる時は、絵本の町が目に浮かぶ。

「絵本の日アワードin FUKUOKA 2017」投稿作品より

本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。

さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本をある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。

グリム童話の時代

グリム兄弟がドイツを中心に、民話や昔話を採集し、編纂した「グリム童話集」は、『白雪姫』や『灰かぶり』『いばら姫』『ヘンゼルとグレーテル』など、世界中の人があらすじを語れるほど流布し、馴染まれています。『おいしいおかゆ』は、『白雪姫』ほど絶対的な知名度ではないにしても、広く知れわたっている昔話です。

グリム兄弟に『おいしいおかゆ』を語ったのは、薬局の娘ドルトヒエン・ヴィルトで、1813年1月10日と記録されています。その昔話が1815年に出版された『グリム童話集 第二巻』に17番として採用されたのです。グリム兄弟による注釈書には、「ドイツのチューリンゲン地方では、謝肉祭にひえのおかゆを食べるのが習慣だった。そうすれば一年を通じて食べものに困らないと信じられていた」と書かれています。

日本もそうですが、民話や昔話は、その地方の風習が土台となっているものが多数あります。

本当は恐ろしいグリム童話

グリム童話といえば、恐ろしい魔女に食べられそうになったり、飢えに困って親が子を捨てたりするシーンがあって、「本当は恐ろしい」話としても定着しています。残酷な物語が多いグリム童話のなかで『おいしいおかゆ』は、少し一線を画した、ユーモラスな楽しみを味わえるのです。

しかしながら、その実は、貧しさと飢えに苦難を強いられている母子２人の家庭にあって、母親の働く姿が描かれず、楽をして食べものにあり付こうとする育児放棄の恐ろしさがあることは否めません。

昔話のおやくそく

『おいしいおかゆ』に恐怖を感じないのは、グリムの「恐ろしい」を象徴する魔女が登場しないところにあるでしょう。娘が森の中で出会う「おばあさん」は、一見、魔女を疑うような登場の仕方ではありますが、飢餓の救世者となるのですから、善人のようです。

昔話には、あちら側の世界の住人がさまざまな姿で登場します。あちら側を彼岸の世界と呼び、その住人を彼岸者といいます。ほしいときにほしいだけ、おかゆがあふれる不思議なお鍋を困っている娘に与えるのですから、おばあさんは地上の人間ではなく、彼岸者というわけです。

昔話が説く現代社会への警鐘

おかゆに溺れそうになる奇想天外な昔話の裏には、貧困と飢餓の時代背景が映し出されているのです。食べものを粗末にしているとも受け止められますが、米ではなく雑穀のキビで作られたおかゆがごちそうという時代の、飢えと闘う貧しい暮らしぶりがみえてきます。食べものがあふれる物語を想像することで、ひもじさによる苦悩を楽しみに変えているのです。

飢餓への恐れは、ヨーロッパのメルヘンに様相を変えて表現されています。『ヘンゼルとグレーテル』では、貧困と飢餓のため、親が子どもを森に捨てます。初版『グリム童話集 第二巻』に収録され、以後は削られた『飢えに苦しむ子どもたち』では、母親が二人の娘を殺して食べようとするのです。『おいしいおかゆ』も、飢餓の裏返しであることがみえてくるのです。

民族間で貧富差の大きな現代において、飢えという体験が身近にない民族には、昔話が飢餓の恐怖を想像するきっかけともなります。食べものへの感謝はもちろんのこと、粗末にしない行動と、飢餓に苦しむ人々のためにできることを考える題材ともなるでしょう。

1800年代前半に口頭で語られた『おいしいおかゆ』は、食べものも文明も、情報機器も、ありとあらゆるものが発達し、ものがあふれた現代の豊かな国への警鐘とも映るのです。

文献

1）小澤俊夫：「おいしいおかゆ」の文法，子どもと昔話(12)，pp.12-18，2002.

2）関 楠生：『おいしいお粥』と『怠け者天国』をめぐって，ユリイカ 31(5)，pp.74-79，1999.